

痛みと憎しみ

S.H. 1952年静岡県生まれ♀

ファッションビジネスに関わって30年、デザインからマーケティングへ、そして今社会デザインへ。価格競争の使い捨てファッションに替わる、持続可能な日本のモノづくりの復活を探る。

2001年9月11日、2002年春夏ニューヨーク・コレクションは始まったばかりだった。いつものように契約している'First View'というコレクションサイトからショーの写真をダウンロードしている夜、突然インターネット接続が切れた。LAN接続は問題なく、ニューヨークにあるサイトが落ちたようだった。仕方なく仕事を切り上げ、帰宅しTVをつけて同時多発テロを知り愕然となった。そしてニューヨーク・コレクションはその日で、2002年春夏コレクションを中断した。中断はコレクション史上初めての出来事であった。

その後行われたミラノ・コレクションでは、グッチ、ドルチェ&ガッバーナなど多くのデザイナー/ブランドが、特別に作品を追加して9.11への衝撃と犠牲者への哀悼を表現した。

1991年の湾岸戦争のときもそうであったが、紛争状態になると日本の大手企業は一斉に海外出張禁止となる。ちょうど、ミラノやパリでデザイナー・コレクションに続き、素材展が開催される時期に、商社、素材メーカー、アパレルメーカーは買い付けに行けなくなる。結果、取引先に買い付けやら情報収集やら依頼され、私のような弱小オーナー経営者は、ガラガラの航空機でパリに飛ぶこととなった。

そろそろアメリカの報復攻撃があるとうわさされつつも、何とか無事素材展が終了し、どうやら日本に戻るまで持ちそうだと安心して、10月7日帰国の日を迎えた。なにしろ、パリ-東京直行便の日本人乗客は展示会の時期なのに異常に少ない。マイレージの優待でビジネスどころかファーストクラスにアップグレードされて待合室で出発を待つことになった。時間になって搭乗ゲートに案内されたが、搭乗直前にアメリカ軍によるアフガニスタン攻撃のニュースが入った。飛行経路の安全確認のため出発を遅らせるという。そこでファーストクラス待合室に戻るよう指示が出た。これは時間がかかりそうだと数人の乗客はすごすごと待合室に戻ったのだが、ファーストクラス・ラウンジのフロアに戻ってびっくりしたのは、アメリカ系だけでなく海外航空会社の待合室からは歓声が聞こえるではないか。乗客にアメリカ人がいただけかもしれないが、出発が遅れしょんぼりとしている日本人とは大違いである。

多くの日本人にとって9.11は衝撃ではあっても一部の当事者以外は他人事であったと思う。犠牲者を悼んでも、それはわが身を切られる痛みではない。私もまた同様であった。しかし、シャルルドゴール空港には、衝撃をわが痛みとし、わが憎しみとした人々がいた、アメリカ軍の報復攻撃に祝杯を挙げられるほどに。欧米人とはこのように感情を共有するのかと気づかされた。ひるがえって日本人はどうも当事者意識が希薄なのか、他人事である。かつて広島を訪れたゲバラは「日本はこんなにひどい事をされたのに、アメリカの言いなりになっているのか」といったという。

その子供たちに宛てた最後の手紙に「世界のどこかで誰かが不正な目にあっている時、痛みを感じる事が出来るようになりなさい」とある。

痛みを感じる事がなければ、怒りも憎しみもない。憎しみの結果としての武力を日本は放棄したが、日本人は他者の痛みを我が物とする想像力も置き忘れてしまったのではないか。

ちなみにこのテロの影響は翌年の2003年春夏コレクションに反映され、70年代反戦運動の象徴として「フラワーチルドレン」を多くのデザイナーが取り上げた。開催日程もテロの記憶が生々しすぎるとして、ロンドンコレクションと日程を入れ替えて行われた。いつも同じ時期に、同じ順番で行われてきた日程が組みかえられたのは、これまたコレクション史上初であった。